

## 日本のコミュニケーションの在り方について

野 崎 ア サ エ

この小論は、日本人のコミュニケーションの在り方に関する一つの考察である。

私は、時おり、地域の青年団や婦人会などの研究会に参加することがあるが、その話し合いの場においてしばしば、幹部の人を中心とする数人の会員に発言が限られて、大部分の人は、無言のまままで会が閉じられる、というような場合を見て来た。そして、つても、これで話し合いの主旨が、よく納得され、うまく実践化されるのだろうかという疑念を持たないわけにはゆかなかつた。

無言でもわかり合うという態度については、桑原武夫氏も、「日本人の話さなくてもわかるという理解のしかたは、同族封鎖安定社会の連続・継続感覚によるものだ。」（同氏著「日本的なもの」『この人々』所収。一三四頁）と述べられているが、今日の私たちは、移り変りの非常にはげしい生活環境のなかに置かれているのであって、無言でもわかり合えると言う状況は、急速に私たちの周囲から喪なわれつつあるのである。だから人びとは、新しい人間関係や生活問題について、そういう集会の持たれたよい機会に

こそ、ジックリと話し合い、考え合い、支え合うべきなのに、と、そのつど私はひとりで考えさせられたのである。これは何も他人事ではなく、私自身の問題でもあるのである。

そこで、この日本人のコミュニケーションの在り方という問題をテーマとして、平素考えていることを、少し述べてみたいと思ふ。

加藤秀俊氏は、アメリカと日本とのコミュニケーションの在り方の比較から、次ぎのように言われる。

アメリカの伝統的本質は、二百年間にわたる移民という人間の雑多さによって形成されたのであって、この他人同志という社会的現実が、話さなければわからない、という相互にコミュニケーションし合うことを要求したのである。

他方、日本の歴史社会は、話さなくてもわかる、という原則から展開している。小さな村落共同体から形成された小社会では、相手の顔つきを見ただけでわかり合えたから、言語生活を発達さ

せる刺戟に乏しかったわけである。無口なのは、口をきく必要がなかったからで、日本人がわかり合うことをおろそかにしたわけではない。言わず語らずの世界に意味を与え、そこから意味を吸収する直感的な認識力、感性的コミュニケーションが、われわれの文化の基調になっている。

ところが今日では、日本においても、多分にアメリカ的狀況が出現しつつあるにも拘らず、われわれがなお沈黙しているのは、話してもわからないという考えが支配しているからだという。そこで問題なのは、アメリカ流のわかるという意味は、少しでもわかれば、全然わからないよりいいではないか、という部分的理解を意味しているのに反して、日本人のわかるというのは、相手の全人格について完全に同一化できるという状態の、いわば全人格的理解を意味しているという心理である。だから、日本人にとって部分的理解というのは、わからないというところと同じことなのである。

そんなわけで、われわれは、なまじ下手な口をきいても結果はムダで、どうせわかり合えないのだと思ひこんでいる。つまり、コミュニケーションに関して一種の完全主義者なのである。(『言語生活』第一二二号三七—四三頁。要旨解説並びに傍点責任は筆者)

つまり、もともと話さないでもわかるはずだった私たちおなじみの同族同志の日本人が、どうせ話してもわからないというように、逆転するのはどうしてなのか、という原因を、全人格的に何から何までわかってもらうのでなくては、わかってもらえたりない気がしないという、私たちに固有の完全主義という心理

のためだと、痛いところをつかれてるわけである。

私たちは、完全主義を止めることから、自分を訓練することが必要とおもわれる。完全主義を止めるということは、何を意味するのか。それは他人を他人として、はっきり承認してかかることによつて、はじめて、他人の立場を諷刺に考へることができるようになるのであつて、小さな差異にこだわらない寛容が育つのはそこからである。それなしにはコミュニケーションの正常な場は生まれてこないと思う。

金田一春彦氏は、その著『日本語の生理と心理』の中で、こう言われる。

日本人の言語生活の根本的態度は、話さないこと・書かないこととであり、中でも特にそういう制約の強かつた重要な場合が三つある。第一に弁解、特に男の場合はその通りだ。第二に人自慢、特に、女性はこれを慎むこととされていた。第三に人自分の意見を出す、日本の芝居で人腹芸や人思入れが重視され発達したが、それも発言を好まない国民性のあらわれであつたらう。

世の中は左様ならば御尤もそうごさるかしかと存せぬ

それは、封建性の重圧のもとに、生活していた庶民の悲しい知恵であつた。(『同著』一一—二六頁。要旨解説責任は筆者)

すなわち、弁解は、自分の立場の表明であり、また人自慢は、事のよしあしを別とすれば、それはすぐれて個性的なものとみなされるであつて、こういう個人主義が否定されたわけであつた。そこには、人間の平等関係がなくて、ただ上から下

への伝統的な規律(命令)だけがあつたので、民主的なコミュニケーションは完全に無視されていた。自分の意思を表明するには、入腹芸Vや入思い入れVという、日本人独自の以心伝心の手段で、相手にわかつてもらつて、そこではじめて、何かしら自分の立場(利害)を主張ならぬ主張のかたちで通すことを得たのであつたろう。

このような権力者と服従者の人間関係は、封建制の最とも敵しかつた武士階級の中でこそ、むしろ顕著な事実であつたと考えられる。が、こうした、武士にしても庶民にしても、「長いものには巻かれる」という、彼等のこの自己否定による保身の生活態度は、現代まで引き継がれていて、社会生活の多様な言行処世術として、日本人の倫理観を基礎づけているように見える。言論の自由が叫ばれている現在において、特に、この傾向は女性のがわに著しく叫がられる。しかし、他人の意見を聞く意思もなく、自己表現をも敢えてしようとしない人間関係の中では、コミュニケーションは一種の暗中模索に終わるのであつて、つまるところ、自己中心の理解しかならたたいのである。常に周辺を多助々という自分だけのモノサシで、自己流に憶測しながら、できるだけ個性を出さないようにするという消極的な処世観のもとでは、多助々の真実な立場をすなおに理解し得ない多助々ボ構敷々の利己主義的な生き方が、人間関係の基礎になつている。

さらに氏は、日本人の「話すな・書くな」の言語観を次ぎのように述べていられる。

たとい、話したり、書いたりしても、あまり効果の生じない、う、に念願しているようだ。それは何にもとづくものか。古くは、

むやみなことを口走ると、それが実現するという素朴な入ことだまVの思想が、後世の日本人には、物を言う、と、わざわいがその身に及ぶという、消極的な功利主義があつたようだ。鶴見俊輔氏も「日本人は、文明国民としては珍しいほど、言葉に対して原始人に近い畏敬感をもっている」という。(『思想の科学』創刊号)ことだま信仰が、日常生活に残っているのは当然である。日本人に、入忌詞Vがあつたり、数字の発音に縁起をかついだりするものもそこから生じている。

古代の日本人は、入コトダマVの信仰から言葉を慎しんだが、後世の日本人は、入言質Vをとられることに極めて用心深かつた。そのため、日常の会話に、ア一とかデスネという入遊び言葉Vが多いわけで、それについて、中川善之助氏も「日本人はうっかり言つて入言質Vをとられてはつまらないからだ」と解釈している。(『言語生活』第一〇号)

日本人が入言質Vをとられまいと用心するのは、日本人が「約束を重んじる」ことを重んじるからだ。しかしそれは自分の入メソツVの問題だけで、相手の立場は全然考慮にいれられていない。ただ、辞を低くするのみである。(『同著』一一二—一四九頁。要旨解説並びに傍点責任は筆者)

氏は、日本人の多沈黙々の原因は、祖先の多言量信仰から一転して、多言質々を取られまいとする多言畏怖観の生じた結果であり、それも体面を重んじるためであると述べられている。

日本人の多沈黙々が「口は禍のもと」と言う保身の功利主義の言語意識から生じたとなると、先に述べたように、私たちが、たとえコミュニケーションの場において、いわゆる多完全主義々を止めた

としても、なお、この言質を取られまいとする用心深さといふ、一種の言語障害が残るわけである。取られまいとするのは、そうさせるものが世間一般にあるからである。こういう用心をさせる環境とは、いったい、何を意味するの、ということを開題にしなければならぬ。

私たちには、他人の言葉や考えをそのものとしてとりあげて考えてゆき、善いことは生かしてゆこうとする誠実・寛容の態度が欠けているように思われる。

西尾夷氏は、次のように言われる。

われわれの祖先の言行観は、言論よりも沈黙・実践、動を肝要とするが、これは、言論の否定や言論の輕視ではなく、ただ言論の方向を規定し、言語に対する人の意識を限定したものである。この言論的威力を具えた実践・実践的威力を具えた言論でなくてはならぬという祖先の言行観が、われわれの伝統となつて、言葉の生活を根基づけている。われわれが、多弁・饒舌を嫌う潔癖さは、この基本的性格の美点であり、また、話し言葉に対する関心が乏しく、話し言葉の文化を發達させなかったのは、この基本的性格の欠陥である。(同氏著「言語生活の探究」二一三頁・要旨・傍点責任は筆者)

と。この言行一致でないし、言論に対する行動の優先という老え方は、そのまま今日でも生きているが、それは、実際に言論が無力なように見えるからでもある。しかし、言論が無力に見えるのは、一面、言論を生かすだけの実践行動力が、私たちに無いから、つまり、一部のエゴイストの行動力に牛耳られてしまっているからである。

たとえば、PTA総会などの集団組織の中で、一部の有力者の發

言に、大部分のものが沈黙のまま賛同を表明しながら、そのじつ、その実践に対しては、全く無関心な態度を取るなどがそれである。特に、因習や伝統の強い共同体であるほど、弱い立場の者の言語障害は強くなっている。

一般の人たちが、容易に發言しないのは、「言ってもムダだ」と思っているからで、言ったことが生かされない現実があつて、しかも利益がないとすれば、言質を取られるよりも、むしろ、黙っている方がマシだと思ふのは当然である。そして、自分ひとりで、自分だけのことをコソコソと解決してゆこうとする生活態度になつていようであるが、しかし、實際問題として、私たちの今日の状況は、個人個人の立場や利害關係を、ますます複雑多岐なものにして来ており、も早、孤立しては生活問題が処理できなくなつて来ているのである。

この目まぐるしい社会機構の中に在つて、自分だけの狭いワクのなかでは、解決しきれない問題が、あまりにも多くなつてきた。それを、どういふふう処理していくのか——諦めるのか、内攻させるのか、でもあろうか。この消極的な生活態度は、そのまま人生観・世界観の基底となつて、身の周辺に沈溺するだけでなく、家族の性格にも必ず影を落してゆくであらう。そこでは問題は解決されないままに、放置されているのである。

そこで、もし一人だけの力では解決が得られないのだとわかれば、必然的に人びととのコミュニケーションが要望され、そこで一人の問題は、社会共通の問題となつて具体化されて来、そこではじめて、実践化されるという段取りになるのである。そして、身近かな問題ほど、コミュニケーションの場では、發言も、理解も、する

意欲が伴っている。仮に、P.T.A.の事業計画の目的が、学校や子供に關する父兄たちの利益にかかわる問題であることがはっきりすれば、その実践行動力は、すこぶる共同的となり、また、実際に効率も高いのである。

こうして、みんなにせひ理解してもらいたいという私だけの問題が、ぜひみんなの力で解決しようという私たちだけの問題と成るところに、はじめて、コミュニケーションが生まれてくるのである。

私だけの生活意識から、私たちの社会連帯意識へと広まってゆくと同時に、その問題が、自分だけのものではない、ということを知るだけでも、また、心が解放されるという効用もあるのである。そして、私たちは、相互理解による問題の実践化とその解決に至る過程で、自分自身を再発見したり、自己認識したりするのであるが、それはすべて、コミュニケーションという言語表現の効用によるのであることを、自覚しなければならぬ。

しかしまた、発言を阻害する原因には、私たちに、難解な言葉や話を立派だと尊大視する考え方々があつて、自分の使いやすい、そして、わかりやすい言葉を使うことに対して、卑屈な偏見のあることを、見落してはならない。服従と沈黙に馴れて来た今日までの私たちは、その伝統的な偏見のために、あまりにも自分の言葉を萎縮させている。言葉にこだわり過ぎるのは、すべて外形にとられるクミテクレ根性々のあらわれであつて人言質への用心深さとともに、日本人の狭いもの考え方・見方によるものである。

古来のク見まい・聞くまい・言うまい・誠実と謙虚の人生教訓の真意は、今では忘れられて、ク見ない・聞かない・言わないク

ふりをする卑しいウソを含む功利的な処世術へと世相は移ってきているが、今日では、ク見よう・聞こう・話そう・考えよう・行なおうという生活感覚が非常に大切となつて来ている。

丸山真男氏の言われる「閉鎖的タコソボ型」生活意識(同氏著「思想のあり方について」『日本の思想』所収、参照)では、私たちの現状は、何ら開拓・進展されようはずはない。私たちにある「言うはやすく、行なうは難し」という実践行動の尊重意識は、今日ではむしろ極端(しっこつ)となつて、発言を封じるに至っているのである。そして、さらに正しい発言があつても、それをみんなで取りあげて、行動に生かすことを考えてゆこうとする共同力にも欠けて来ていると考えられる。発言をバカにする前に、私たちの行動意欲の無いことを反省しなければならないので、発言を生かしてゆく善意と行動力が、私たちに必要なことなのである。そうしなければ、私たちの生活は、いつまでたつても、現状維持のまま、堂々めぐりに終わるということを、もっと真剣に考えてゆくべきではないかと、思っている。(三七・一一・一三)

(本学助教授)